

最初の日撃者 大岡昇平



気鋭の文芸評論家は、誰に、なぜ、殺された？

大岡昇平初の**推理**小説集

「日本推理作家協会賞」受賞第一作、文壇を舞台に描く表題作他

最 初 の 目 撃 者
大 岡 昇 平

集 英 社

最初の目撃者

一九七九年六月二十五日 第一刷発行
一九七九年七月三十一日 第二刷発行

定 価 八八〇円

著 者 大岡昇平

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部二三〇一六三六一
販売部二三八一二七八一

印刷所 中央精版印刷株式会社
検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1979 S. Ōoka

Printed in Japan 0093-772200-3041

最初の目撃者・目次

最初の目撃者

7

盗作の証明

55

夕照

91

疑惑

119

秘密

137

真昼の歩行者

157

驟雨

179

春の夜の出来事

195

お艶殺し

211

あとがき

259

装
幀

司
修

口絵写真提供 中央公論社

最初の目撃者

最初の目撃者

第1章 作家は批評家に弱いのか

新進批評家の建部隆之介が、銀座のバー『オーロラ』で、

「おれが声をかければ、作家の安城光春は、きっと来る。十万円賭けてもいい」

と言ったので、同席の同じく新進批評家風見成行、文芸雑誌『創造』の編集者松永三千男は、びっくりした。

「そんなに自信をもって言い切っていいのかい。相手は流行作家だぜ」と風見が言った。

「流行作家であればあるほど、批評家を大事にする。おれが電話して来ませんかと言えば、絶対に断れないはずだ。いくら忙しくても、きっと来る。そしておごってくれるよ」

「ほんとうかなあ」

「じゃ、すぐ電話する。聞いてろ」

建部は立ち上ってカウンターに歩み寄った。電話機を取りあげ、ダイヤルを廻した。

「もしもし、安城さんですか。建部です。（安城は建部より十四歳年長の四十六歳だから、昔な

ら“先生”と言うところだが、“さん”ですませるのが、戦後批評家の見識である。いま、『創造』の松永君と風見成行君と、『オーロラ』にいるんですがね。あなたが今月お書きになった短篇『跳躍の余白に』と『明日へのドア』について、議論が分れましたね。作者の意見をききたいってんで……」

建部は大きなことを言っても、誘い出す工夫をこらしているように聞こえる。

「そうですか。お忙しいんじゃないんですか。……じゃ、お待ちします、どうも」

建部は胸を張って、席に帰って来た。

「どうだ、おれの言う通りだろう。作家は批評家に弱いからね。ことに今月書いた作品の話となると……」

「『明日へのドア』の方はまあまあとして、『跳躍の余白に』の今日的な問題を見付けるのはむつかしい。知らねえぞ、ぼかあ」

風見は心配になってきたらしい。

「なに、どうとでも言つときゃあいい。時評で取り上げるかどうか、ほめるかけなすか、こっちの胸三寸、筆のひねり一つだからな。安城先生はおれが声をかけりゃあ、必ずおでましになるってわけだ。車を運転するのがご自慢だが、飲まなきゃあならないから、タクシーでいらっしやるだろう。南麻布のマンションから三十分はかからねえだろうよ」

編集者の松永はこの話は文壇ゴシップとして、三日のうちに安城の耳に入るだろう、と思った。安城はいまが書き盛りの中堅作家で、純文学雑誌に力作を発表する一方、新聞や週刊誌に連載ものを、最低一つは持っている。一方、文壇の新風にも気を付けていて、特に批評家を大事に

する。構造主義、ロシヤ・フォルマリストのものは、大抵翻訳で読んでいる。流行作家としては珍しく、欧米の新作について、若い助教教授の家を訪れて、新知識を仕入れたりするという。

建部はいま新進批評家のトップランナーで、近代文学史研究の方面にて実績があり、『中央新聞』の文芸時評を受持っているから、大事にされるのは当然として、「おれが呼べば必ず来る」というセリフは少しおだやかではない。

バー『オーロラ』は出版社が接待に利用するから、多くの文壇人や文化人の馴染客があった。現に向う側に坐っているサングラスをかけた若い男など、そんな連中の一人のように思われる。ああ大きな声を出しちゃ、みんな聞いてしまう。編集者である自分は無論だまっているつもりだ。ママの須美も心得ているだろうが、ホステスに箝口令かんこうれいを布くわけにはいかない。彼女たちの口を通じて、うわさはひろがるだろう。いくら若い世代の機嫌を取る安城でも、これは聞きのがせないだろう、と思った。

しかし編集者としての松永は、批評家建部も大事にしなければならない。

「ふーん、大したもんですなあ。なにかまとまった意見をお持ちでしたら、安城光春論を書いて下さいませんか。今夜の談話を中心にしてもいい——テープが取れりゃあいいいんだがな」と抜け目がない。

「安城光春論は三年前にやったことがある。僕は一度書いたことの、むしろ返しはしないことにしていますので。今月の時評で取り上げるかどうか、まだきめてないんです」

「ごもっとも」

三十分後に安城は、そのすらりとした長身を『オーロラ』の入口に現わした。自分についてそんなことが言われているとは露知らず、にこやかな笑顔を作って入って来た。

「やあ、今夜はお揃いで、対談の流れ？」と松永にきいた。

「いえ、偶然、創造社でいっしょになって」と風見が引き取る。「ちょっと喰わせるスペイン料理屋が、みゆき通りにできたってんで、出て来たんです」

「ふーん、みんな元気で、うらやましいな。ほくの方はひる寝ばかりだ」

「お休みのところを、お呼び立てして、ご迷惑じゃなかったでしょうか」と松永があいさつした。「いや、ちょうど目がさめたところだった。一つ仕事を片づけたところで、ひと恋しくなつてた矢先で、ちょうどよかった、みんなに会えて」

「どんなお仕事で」と松永。

「いや、あるPR雑誌のコマギレ原稿ですがね、今月は小説は二つ書いたから、疲れが残っているのかなあ」

建部の電話では、自分の作品が話題にされていた、ということだった。あいさつに来たママの須美や、ナンバー・ワンのジュンのご機嫌取りはあとにして、話をそこへ持っていこうとの魂胆が見え見えの口ぶりだが、建部は聞こえないふりをしている。となりに坐った若いニューフェースのヒトミに、

「おい、君どつかで見たことあるな。前に新宿の『ロマンス』にいたことない？」

なんて、きいている。風見が取りなした。

「先生の（彼は建部より五歳年下でまだ駆け出しだから先生と呼ぶ）、『跳躍の余白』は、戦

後三十年の先生の経験と、今日の心境がにじみ出た佳品だ、と思います。主人公が「首うなだれて」「皇居前を歩く場面なんて、しみじみした感じが出ていますね、先生よりひと世代前の戦中派を扱っていられるけれど——それに反して『明日へのドア』は今日の若い世代の群像が描かれている。視角の垂直性において、日本のタテ社会構造と連動しつつ、ヤングの風俗的レクチュールを含みこんでいる。全体性の確立のうちに、むしろこの作品の方に「跳躍」が期待されているように僕は読みました、あたってるかどうか自信はありませんが——先生がこの二作をコンビにして、同時に発表された明敏さというか、戦略というか……」

「いやあ」

安城は彼の文壇的トレード・マークのジェスチュア、つまり出版記念会や各賞の授賞式のパーティなどで、仲間の文学者や編集者の前で、きまって取るポーズというのだが、そのてれたような微笑を浮かべて、しかし自分の作品が論じられるうれしさはかくし切れず、

「いやあ、あれは偶然そうなっちゃったのよ。『跳躍の余白に』は、一年前に書いてあったの。『余白』という文句を、題に入れることをこんど思い付いただけで……」

「その組合わせ、二作合わせて弁証法的と言うか、なんと言うか……」

「弁証法は古いと思いますね」

建部が口を挟んだ。

「二項対立って言うか、二律背反って言うか、そういう両義性的関係を考えればいいのではないか、マルクスの弁証法はもはや批判しつくされてるでしょう。言うまでもないことだが——」
「つまりフランクフルト学派が、一九四〇年代にやったような批判を言うんですか」

安城は耳学問のあるところを見せる。

「いえ、僕の考えてるのは、そんな古臭いことではない。彼等は結局のところ西部ドイツ特有の中間領域志向症候群に陥っている。しかし僕の思考は対立におけるアイデンティティの発見と確立を目指している。コンピュータの二進法に準拠する思考定理に基づいて、一、二、一、二と進む……」

「コンピュータはゼロ、一、ゼロ、一じゃないですか」と安城。

「わかってますよ。みなさんにわかるように、勘定したんです。要するに弁証法の正反合、一二三、一二三という三拍子は時代おくれです。日本には本来三拍子はない。あれは西欧と朝鮮にだけある亡国的リズムです。日本人の耳は二拍子より受けつけない。二進法、二分法、二面性、二元性、二極性、両義性、両立性、双曲線、双務的、二分法……いや、これはもう言ったか」

建部の講釈が続いている間に、安城の顔にいら立ちの色が見え始めたのを、松永は見てとった。建部のおしゃべりは彼にも少しくどく聞こえたが、特に「二分法」という言葉は、安城に気に入らないのではないか、と思った。なぜなら安城は一年前に、五年以上連れ添った悠子夫人と、あまり愉快でない経過で別れたのは、文壇でだれ知らぬものはないことだったから。

だから彼は目下、南麻布の有栖川宮記念公園近くの『レインボウ・レジデンス』の七階の一室に一人暮ししている。子供はなかった。それ以前に学生時代から結婚していた糟糠の妻ともいふべき夫人と離婚していた。そして銀座のクラブ『ローヤル』にいた悠子と再婚したのだが、それも破綻したのである。もう結婚はこりごりだ、一人暮らしの方がいっそ気楽だ、独身だと女が寄りついてくるから不自由はないと言っていたが、微妙な問題があった。なぜなら悠子夫人は、宝石